

## 中央ガンダーラの遺跡市（現西北パキスタン） バルシャ（跋虜沙）の位置について

(about the location of Pa - Lu - Sha in the Central Gandharan plain)

久我 篁子

### Abstract

The main body of this research in this paper was performed By Dr Errington of the British Museum.

The contributions I made is addig some notes on the locations of the sites as I frequented the area. Believing that my research made the original essay more perspective and clearer I present this unique opinion in this field. I had a permission of translation into Japanese by Dr Errington.

Key words: Hsuan - thuan, location of Pa - Lu - Sha, mounds, Buddhist sites, Coins

玄奘、跋虜沙の位置、塚、佛教遺跡、古銭

ガンダーラ研究において、法顕<sup>1</sup>、宋雲<sup>2</sup>、玄奘<sup>3</sup>の旅  
行記録に基づいた、アレクサンダー・カニングム<sup>4</sup>、続  
いてはアルフレッド・フーシェ<sup>5</sup>による、ガンダーラ地  
域に於ける仏跡の位置付けが最初に行われたことは周知  
の如くである。殊に玄奘の記述は詳しく正確とされ、現  
在いうところのタキシラ、ペシャワール南東にあるシャ  
ジキデリにあるカニシカ塔、チャルサダ（プシュカラ  
ヴァティ）の都邑、インダス河西岸オヒンド（ウダパン  
ダプラ）等の重要な場所の比定はその記述に立脚して、  
カニングム、フーシェらによってなされ、今もその説が  
一般に受け入れられるところとなっている。併し、それ  
らの説は19世紀及び20世紀初期の発掘を基にしたもので  
あり、その後の研究も多数あることから、見直しの必要  
があると思われる。この稿では、殊にペシャワール溪谷  
と言われる地域の、宋雲が仏沙伏（Hosyafu）と表現  
したところと、玄奘のいう布路沙布羅（Pu-lu-  
sha-pu-lo）が同一地域であるかどうかということと  
関連して、周辺地域の比定の調整を試みた。又、ここで  
注意を喚起したいのは、カニングム、フーシェが旅行記  
録を翻訳<sup>6</sup>で解読し、漢文知識の介入しない土俵で比定  
をしていることである。

法顕の時代、ペシャワールとその周辺は弗楼沙  
（Fu-lou-sha）と呼ばれた。ガンダーラと言うのは、

現ペシャワール溪谷と同じ領域からなる独立国であった  
と思われる。宋雲（519-20 現地通過）によるとペシャ  
ワールのカニシカ塔に関連する周辺地域と無名の市を含  
めてガンダーラとするとし、その状況は632年玄奘が  
行った時も同様の様子で東から西へは千里余、南北も  
800里余で東はインダス河まで延び布路沙布羅（プル  
シャプラの音訳、ペシャワールの古名）が首都であるとい  
う。法顕のいう弗楼沙もペシャワールと同じであるが、  
これは5世紀中国音訳プルシャプラの訳で、7世紀のプ  
ルシャと同じシラブルPULOを使っている。双方に梵  
語のプラ（市街）が含まれているのだが、法顕の段階で  
は省略されているのがわかる。

シャヴァンヌ<sup>7</sup>は宋雲の仏沙伏の伏を pura（市街）  
の最初の音だけとったのではないかと推定、従って仏沙  
伏羅ではないかと言う。

玄奘がおそらく省記した跋虜沙をここで問題としたい。  
宋雲はc.520年に人口多く緑滴る豊かな町があるとす  
る。訳は人によって違うがビール訳をみると、市街壁が内外  
ともがちりして町と郊外との区画を示唆する。玄奘  
のc.630年の記述には特に東門が付加されている。宋雲  
のBeal訳を続けてみると；----- In all the old  
temples which are found inside and outside the  
city, the monks and lay worshippers are faithful

followers of the Doctrine. One li (約322m) to the north of the city is the palace of the white elephant (Visvantara Jataka); in this temple the Buddhist cult images are all made of stone; they are beautifully ornamented, very numerous and entirely covered with gold-leaf which dazzles the eyes. In front of the temple is the tree to which the white elephant was tethered and because of which the temple was founded.

長沢和俊<sup>8</sup>では；―――また西行すること三日で、プルシャ（仏沙伏）城に至った。流域の原野は沃壤で城郭はしっかりして立派であり、民戸は豊かで数多く、林は茂り泉は豊富である。土地は珍宝多く、風俗は淳良である。

プルシャ城の内外には多くの古寺があり、名僧、公德の人も多く、徳行も高くすぐれている。城の北一里に白象宮がある。この寺の中の仏像は皆石像で、莊嚴（かざり）はきわめて麗しい。石像の数も非常に多く、全身に金箔をつけており、見る人の目にまばゆく光輝いている。寺の前に白象を繋いだ樹があり、この寺の起こりは実にこれに由来するのである。

玄奘も又市の北に同じく塔があることを述べ、その側には小乗寺があり50人余の僧の存在を認めている。

水谷真成<sup>9</sup>訳で続けてみる；―――跋虜沙の東門の外に一伽藍がある。僧徒は50人余の僧がおり、みな大乘の学をしている。穿渚波がある。無憂王が建てたものである。昔、蘇達努太子が斥けられて弾多落迦山（旧に壇特山と言う。訛なり）に居た時太子の男女の二児を乞い求めここで二子を売った。(Visvantara Jataka)

玄奘は弾多落迦山が跋虜沙東北約20里（6.4km）の地点にあり“崖に洞窟”と“小屋”そしてアショカ塔のある Visvantara Jataka に関わる処であると記す。

上記を纏めてみると、跋虜沙はかなりの寺院や塔を有しその幾つかはまだ機能している大きな町の中心地であったことが窺える。宋雲によると、タキシラから西向けに旅してインダス河まで三日要したと言うが方向としては西北方向でアトックの少し川上あたりで渡河したのであろう。これは大体64kmの距離であり、一日平均21.4キロ位進んだに違いない。このペースで西向けにパルシャまで三日かかっている。<sup>10</sup>大まかな比較だが、1890年代にフーシェはオヒンドからマルダンへ着くのに三日かかりサワビ周り（最初は少し東北方向）の50キロの道のりを西北シャバスガリへ向けている。ここで、宋雲が

常に西方向へと目指していることに注目したい。むしろラホール經由（45キロ）の西直線を行ったのではないか。これで行くと、フーシェ同様の一日約16キロとしてマルダンを少なくとも5キロ先まで越えたのではないか。宋雲のタキシラからインダス河間での健脚を思えばなおのことである。そして宋雲は仏沙伏から更に西へと歩を進め“捨眼の塔”に至る。玄奘は布色褐羅伐底プシュカラヴァティからここまでを北5里（1.6キロ）とする。フーシェは捨眼の塔の所在地<sup>11</sup>をバラ・ヒサル土壘（241×201×17.5m）に<sup>12</sup>比定したが、この遺跡は後続の発掘によってBC 5, 6世紀の住居群跡であることが判明した。<sup>13</sup>ウィラーはシャフリバロール東面豎掘で処女土上12.5m土表面から下5mのところをガンダーラ期の痕跡を発見したと述べている。バラ・ヒサールの直ぐ北のシャイハンデリ跡はBC 2世紀半ばのものでクシャン朝ヴァスデヴァー一世（ca. 2世紀A.D.半ば）期に遺棄されたのだがそれは現ラジャ地域間で氾濫した洪水のためだったと思われる。<sup>14</sup>ここにシャプルナプルサン（350m×198m）の地域に一連の塚がある。<sup>15</sup>20世紀初頭の発掘によって遺跡はもっと規模の大きいものであったことがわかったがバラヒサル及びミラバド間の西側は10世紀以後川の氾濫で起きた浸蝕あとがみられる。<sup>16</sup>よってこれこそ中国求僧達が訪れた都邑ではなかったのか。残念ながら総合発掘はまだなされていない。1902-3年にミルジアラット跡の一番大きい塚の南東縁を試掘したところ、一番底部にメナンドロスとヘルマイエスのコインが発見され、その上はガンダーラ石片とカニシカコイン出土と同時にダイアパー式壁が見出されたのである。<sup>17</sup>

1882年マーティン大尉指揮下のサパーズ&マイナーズ発掘報告によると塚の頂点7mに仏教遺跡があったという。<sup>18</sup>シャリナプルサン地域のミルジアラット他7ヶ所での一次発掘でもたらされた菩薩彫刻の台座がラホール博物館（保管番号1194）に保存され、<sup>19</sup>他に50点がチャルサダ招来としてラホール及びチャンディガー博物館に分割保管されている。<sup>20</sup>ミルザラットの約2キロ東北地バボラシャカでもスタッコ、石材での仏像が発掘されている。もう少しよく知られたガンダーラ遺跡として、ラジャーの直ぐ東にガズデリとパラツデリがあるがパラツデリは殊にハナツナガル台座文字 the year 384（大英博物館 OA1890, 11-16,）出土地として銘記されてよい。<sup>21</sup>しかしながら、シャリナプルサン廃墟地域の資料が一般的に少ないことで、玄奘がプシュカラヴァティの近辺にあると記した捨眼塔のあるラジャー地域、その他

の塔の所在の比定が難しい。ラジャー、マルダン間の距離は凡そ26キロだが、宋雲の一日約22キロ進度をあてはめると、捨眼塔につくにはパルシャ（跋虜沙）の地はマルダンの西に位置しなければならないことになる。宋雲はそこから一日かかって河に辿り着き更に60里19キロをベシャワルへと旅した。ざっとした比較だが、現在の道路で35キロ程であるベシャワル、シャイハンデリ（ラジャーの対岸地）間は宋雲の足だと二日で軽く行ける。

玄奘記の分析はそう簡単にはいかない。おとずれた地もずっと多いし、距離の記述がその時取った行路の難易によって違っているからである。ガンデリ付近のある地点に行くのにプシュカラヴァティから北北東105里32キロそれから件のパルシャ（跋虜沙）へ北東50里16キロ、最後に南東150里48キロでインダス河畔都市オヒンドに達している。フーシェは、玄奘が東への道を取る前に南下してプシュカラヴァティに戻ったのではないかとするが、<sup>22</sup>この推論は19世紀末フーシェの見た現地状況に基づいたもので、七世紀当時は町と郊外に広がり無数に点在する数寺院との間にはもっと緊密な意味での道が存在したであろうとの想像力にかけている気がする。もし戻ったとしたら、北北東へ105里を記す前にその距離を記す筈である。

カニンガム、フーシェ共にパルシャ（跋虜沙）をシャバズガリと比定した。有名なアショカの巨岩碑の存在が決定を促している。しかしながら、アショカの時代から玄奘の訪れたその時期までの9世紀にわたる年月を、シャバズガリがそれらしき都市であったという考古学上の証拠が何一つ見いだせないのである。フーシェは一回りの巨石壁を指摘しているがそれは1970年時でも見られるものである。<sup>23</sup>

それ以上の遺構は無く、一連の陶器が発見されたのみで、フーシェは近くにある“小型三角丘”の自然地域に都心部は潜んでいるのではないかと判断をくだす。それにしても大きな街邑を擁するには限られた感じだと付け加えながら。<sup>24</sup>

実際市街の跡、仏教遺構は皆無に等しい。<sup>25</sup>近郊にあるメハサンダ、ガンダーラ僧伽藍検出のコイン<sup>26</sup>をみても5世紀半ばまでにはカルトはなかったように思える。宋雲が直通したものからの計算で、パルシャはマルダンの西に無くてはならないと思われる。もしこの仮説がなりたつなら、玄奘が東北から目指した（少なくとも3日かかっている）200里という距離は、余程酷い道で時間がかかりすぎたか或いは書写される段階で間違えて写記されたに違いないのではないかと考える。<sup>27</sup>又、場所を

比定する際に玄奘の計った距離を第一義的なものとして考えないほうがよい。殊にそれが考古学的データと相反するのであれば一層のことである。

ガンダーラ平野中央の都市居住地区については殆ど知られていないが、仏教遺跡は可成り良く記録されていて、ここにあげる一つの遺跡が、パルシャ（跋虜沙）、仏教寺院に囲まれた殷賑を極める市、という中国僧の記録に該当する。それはシャフリパロルなのである。一番大きくて、同地域でも一番良く残存している。マルダンの北西11.3キロ、ラジャーの東・19キロ、タフティバイ南3.4kの地点にある低地は肥沃で沼沢が多い。<sup>28</sup>現存村が旧地に建っているため発掘は無理だが、1860-72年の村再建が始まったばかりの時のカニンガム・ビリューの調査を繙いてみる。<sup>29</sup>

マウンドの主要部は、四方に門をもつ長方形の壁で囲まれ365×183m縦横の長さを持つ。西壁外に添って居住区が183米ほど広がっている。後のオーレルスタインの調査では402×201mとの報告でカニンガムより少し大きい。<sup>30</sup>

カニンガムはマウンドの東側の一連の壁を辿り、一方ビルーは西サイドの市壁を調査、“驚く程の正確さでマイカシスト雲母片岩の石材が平地から垂直に築かれている”と述べている。1906年スプナーも又“基礎壁に築かれた高くて頑丈な壁全体はガンダーラ建築の最高をいくであろう”<sup>31</sup>とする。壁の一部分及び斜状補強壁は現在でも散見できるがダイアパー式もあるものの地域できり出された半切石造りが主である。後者はジャマルガリの最終築構期に発見されるもので、マーシャルが4、5世紀のものと判定したタキシラの構造と比較できる。<sup>32</sup>

1864年ビルーは同地を調査し、次の様に記す。

“表面は瓦礫石が相当厚くあってくずれ壁のガラクタもあるが、建物は出入り口を中央の庭に向かって持つ小さい部屋のある集落がある・・・これらのがれきの中には宗教臭を持つ像とか彫刻などは一切発見されなかった。どこにいても四角く小さい部屋が沢山ある。・・・密に建て込んだこれら建物からみて繁栄期にはさぞかし人も多く殷賑を極めたであろう。”

ビルーは石膏材囲いの縦5m差し渡し2.4mの穴をさらに8.2m掘り進め13.7mの深部でスレート敷き床につきあたりそこで、小さい座仏をみつけた。その下は土も硬く石とがれきが混じったもので、カニンガム推定の如く<sup>33</sup>13.7mの築山は、人工的であることがわかる。仏像

が直接入れられたかもしれないし、同時に底部構成時のものかもしれない。もし底部構成時のものだとすると仏教関係時代は土壘表面下5.5mにあると推定される。これは、仏陀跡が、近在のバラヒサル5m、ミルジアラット7mという同高層にあることを考えあわせると殊に可能性が強くなる。カニンガムはシャフリバロールの全高を27mとし、西側の低地集落部を10mとした。これはビールーの全高18mに比して誇張計算のきらいがあるが、実際はこの二つの計算の中をとったくらいのものであろう。主要市街部は一連の集落塚に囲まれているが、スタインはそれを準郊外村落と説明した。同地の沼沢状況からみて点存的になるのはうなずかれる。

スタインはこの二次マウンドは相当長期間居住されていたとみる。陶器片やコインがクシャン朝から9世紀にかけてのものまでみられるからだ。<sup>34</sup>後者については、カニンガムは特にスパラパティデバ8世紀サマンタデヴァ（トルコ出身の為政者）時代の無数の銀銅貨の発見を指摘している。スタイン調査時、散在している24の小さい塚があって、そのうち15箇所からは彫刻片などから判断し、ガンダーラ仏跡と認められた。特に10箇所の塚からは大量の様々な彫刻が出、今はペシャワール博物館に収納してある筈である。<sup>35</sup>コインとしてはC塚<sup>36</sup>から4ドラクマ銀貨一枚（アゼス名）とB塚からソーターメが出たのみである。この2遺跡からとF塚からとのハスデヴァ1とその後継者達のもので、他にヴァララム4世（388-399）とキダラ<sup>37</sup>の一枚B塚から出た。スタインはC、F塚からの出物を小クシャン朝またはキダラ時代のもので示唆している。<sup>38</sup>発見古銭から証出される年代は1世紀から4世紀後期と限られているが、実際は古銭年代よりもっと長くカルトが続いたことが考えられる。C、D塚で仏教僧院が破壊されたのは明らかだが、後に仏塔は再建され仏塔台自体は破損したガンダーラ彫刻を展示するのに使われた。<sup>39</sup>これはヘプサライトの5世紀征服時破壊と関連づけられ、<sup>40</sup>彼の訪が520年頃の二世代前になされたこと、宋雲は記録している。又宋雲訪地の時は、仏教がまだ行われていた。それで、彼の記述は、発掘記録とも合致するものである。B塚で“一握りの土提供”仏話のステッコリーフで6世紀と思われるものが20×74cm<sup>41</sup>の仏塔の横側装飾として発見されたがここも宋雲時代までは放棄されていなかった記述がある。ダマミでは大きな破損弥勒菩薩が再建され花崗岩台座が欠失したシストの代わりに置かれ、欠損菩薩像が人骨と共に塔の中央部に埋められていた<sup>42</sup>。塚の再使用は仏教だけに限られてはいず、E塚ではガンダーラ仏塔

はブラマン廟のベースとなり、コイン<sup>43</sup>やヒンディシャヒ白大理石彫刻片が10世紀位までそこで何かが行われていたことを証する。シャフリバロールからの散発発掘品には世紀前2世紀から4世紀頃までの無数の色々なテラコッタ像があるが、<sup>44</sup>後期ガンダーラスタイルの小シスト像（5世紀から6世紀）、<sup>45</sup>青銅仏像二体（5-7世紀）、<sup>46</sup>ヒンズーシャヒ時代に属すると思われる白大理石リング等が発掘されている。<sup>47</sup>構造細部詳細証拠にはかけるものの広範な域に亘る多彩な発掘物がこの地域の10世紀あたりまでの活況を物語る。その上、中央ガンダーラ平野にシャフリバロールが跋虜沙であるということに疑問をはさめる他の市街地がないのである。

## 結 論

結果として玄奘記すところの跋虜沙をシャフリバロールと比定すると、東北20余里（6.4キロ）がタングロカ弾多落迦山であり現在のタフティバイであるという説を立てることができる。距離また方向の記述に僅かな差異があるが、丘陵の麓まで3、4キロ行った後、北斜面の仏跡に着くため東向きに山を登ったことで説明がつく。

この寺院の礎石はアガソクレス時190-180BCに遡れそうでこの為政者の腐食した銅貨が敷地東側の天蓋地下室から発見された。<sup>48</sup>

それで玄奘が親しんだ仏塔がアショカ塔であろうと考えられてくる。もう少し想像を働かすと、地下室は本生物語ヴィスヴァンタラジャタカとの関係が考えられまいか。当サイトは19世紀の発掘でかなり痛めつけられガンダーラ期以後の様子についてはビールーのレポートが色々伝えている。ビールーは<sup>49</sup>“1860年代始めにはヒンズー教残片が廢墟にたくさんあった。銅貨は一面が前肢をのびたライオン像、反面には象がかたどられサンスクリット語が書き込んである。”と記す。<sup>50</sup>地域に伝えられた説では、モハメトガズニがこれを攻め廢墟化したということである。

以上をもって跋虜沙が、シャバスガリではなくシャフリバロールであろうとの見解を示した。

以上

注

- 1 生没年未詳399から15年間天竺へ求法の旅、法顕伝（“仏国記”、“歴遊天竺紀伝”とも言う）
- 2 生没年未詳北魏孝明帝（516-528）時代、帝使として天竺へ。“北魏僧惠生使西域記”“洛陽伽藍記”その他の旅記が出る。
- 3 （602-664）629年から17年天竺へ求法の旅“大唐西域記”がある。
- 4 Alexander Cunningham (1814-1893) 23冊調査報告“碑文集成”等多数
- 5 Alfred Foucher 19世紀仏考古学者“Notes sur la géographie ancienne du Gandhara”他多数
- 6 S. Beal “Siyuki, Buddhist Records of the Western World. 2 vols, 1910, London
- 7 Chavannes “Voyage de Song Yun”, pp. 418-20
- 8 “法顕伝・宋雲行紀”東洋文庫194 平凡社1971 pp. 205-206
- 9 “大唐西域記1-玄奘”東洋文庫653 平凡社1999 pp. 248-249
- 10 ここに記す諸距離はシャヴァンヌの“Voagede Song Yun” pp.418-9から引記。ビールの“Buddhist Records” p. cii でもタキシラからインダス河まで三日、パルシャからブシュカラヴァティまでを一日かかったとする。それでインダスからパルシャ間で13日かかったというのは筋が通らない。
- 11 Foucher, Notes on the Ancient Geography of Gandhara, p. 37, n.1
- 12 “List of Ancient Monuments in the Frontier Circle,” ASIFCAR1919-20, Appendix V, p.11
- 13 M.Wheeler, “Charsada: A Metropolis of the North West Frontier (Oxford, 1962), pp. 18-36
- 14 A.H. Dani, “Shaikhan Dheri Excavation, 1963 and 1964 Seasons,” Ancient Pakistan2 (1965-1966), pp. 23-26
- 15 HBW Garrick, ASIR 1881-82, vol.19(Calcutta, 1885), pp.107-10.pl.XXII; “List of Ancient Monuments,” ASFCAR 1919-20, Appendix V, p.12
- 16 J. Marshall and J. Ph. Vogel “Excavations at Charsada in the Frontier Province”, ASIAR 1902-3 p. 145
- 17 Ibid., p.154-60
- 18 Ibid., p.155; M.Martin, “Exploration of Buddhist Ruins at Charsada, Peshawar Valley”, Punjab Public Works Miscellaneous Public Improvements, p.19, no. A-1, Appendix, fig. 1
- 19 J. Ph. Vogel, “Inscribed Gandhara Sculptures” ASIAR 1903-4, p. 244, no. LVIII, pp. 123-24
- 20 Original Lahore Museum Nos. 1151-52, 1154, 1159-60, 1163, 1165, 1168, 1170-71, 1177, 1181, 1183-99, 1202-25. Nos. 1160, 1163, 1190, 1192, 1210, 1212, 1216-18, 1221 are now in the Chandigarh Museum.
- 21 Konow, “Kharoshthi Inscriptions,” no. LIII, pp. 117-20, pl. XXII
- 22 Foucher, Notes on the Ancient Geography of Gandhara pp.23-25
- 23 A.Foucher “L’art Greco-bouddique du Gandhara” vol1, Paris 1905 p.101
- 24 Foucher, “Notes on the Ancient Geography of Gandhara”, pp. 23-25
- 25 A. Cunningham, ASIR 1872-73, vol. 5 (Calcutta, 1875), pp. 8-23; “List of Ancient Monuments” ASIF-CAR 1915-6 Appendix V, p.36;
- 26 S. Mizuno, ed., “Mekhasanda: Buddhist monastery in Pakistan, Surveyed in 1962-1967 (Kyoto, 1969), pp. 94-95: all copper issues, one each of Kaniska, Huviska and Vasudeva I respectively; five late Kushan “Vasudeva type”
- 27 E. G. Watters On Yuan Chwang’s Travels, p. 214, notes that the distance between the Kanishka stupa and Pushkalavati is given as “above 50li” and “100li” in two different Chinese texts relating to Hsuan-tsang.
- 28 IO/ASIFC 1911-1912), photograph nos.1273-76. See also H.W.Bellew, A General Report on the Yusufzais (Lahore, 1864; repr.1977), p. 140A.. Stein “Excavation at Sahri-Bahlol” ASIAR 1911-12, p.97
- 29 Bellew, Yusufzais, pp.137-39; Cunningham ASIR 1906-7, pp. 137-38
- 30 Stein, “Excavations at Sahri-bahlol” p.96
- 31 D.B.Spooner “Excavations at Sahribahlol”, ASIAR 1906-7, pp.102-3
- 32 The latest coins from Jamalgarhi are silver issues of Kidara, datable to the late 4<sup>th</sup> century A.D., ca. J. Cribb “Numismatic Evidence for Kushano-Sasanian Chronology”, StIr 19. 2 (1990), pp. 157-58, 179-81; E. Errington, “The Western Discovery of the Art of Gandhara and the Finds of Jamalgarhi” (Ph.D.thesis London University 1987)
- 33 Cunningham, ASIR 1872-73, vol. 5, p.37
- 34 Stein, “Excavations at Sahri Bahlol” pp.96-97
- 35 Bellew, Yusufzais, pp. 139-43; Cunningham, ASIR 1872-72 vol.5, pp.43-45; D.B.Spooner, “Excavations at Sahribahlol” ASIR 1909-1910 pp.102-5
- 36 Stein, “Excavations at Sahri-Bahlol” p.108
- 37 Spooner, “Excavations at Sahribahlol” ASIR 1909-10, p.49
- 38 Stein “Excavations at Sahribahlol” ASIRA 109, 116
- 39 Ibid., pp.101, 110-11
- 40 For a reconstruction of this process at Monud B, see Tissot, “The Site of Sahri Bahlol (Part III),” pp.755-58
- 41 Ibid., pp.757-58, fig.6
- 42 Bellew, Yusufzais, pp.140-42. 発掘品や像の形態については、Tissoの“The Site of Sahri Bahlol”参照。骸骨の存在は当時の佛教葬送法と必ずしも矛盾しない。G.De.Marco, “The Stupa as a Funerary Monument: New Iconographical Evidence”を参照のこと。
- 43 Stein, “Excavations at Sahri-Bahlol” pp. 115-16 銅貨2枚（A.D.750-850）が発見されている。

- 44 Gordon, "A Survey of Ancient Gandhara" pp.12, 15  
 45 Victoria and Albert Museum: Mother and child IS 507 - 1950; Musicians IS 14 - 1948 IS 505 - 1950 Yaksi IM 41 - 1939  
 46 E. Errington and J. Cribb, eds., *The Crossroads of Asia: Transformation in Image and Symbol* (Cambridge, 1992), nos. 210 - 11, pp.218 - 22; British Museum OA 1958, 7 - 14, 1; Victoria and Albert Museum IS 12 - 1948.  
 47 A. Cunningham, ASIR 1872 - 72, vol. 5, 5, p. 45, pl. XII - 6  
 48 H>Hargreaves, "Excavations at Takht - I - Bahi" ASIAR 1910 - 11 (Calcutta, 1914), p. 34  
 49 Bellew, Yusufzais, p. 136.  
 50 Coins of Vakka - deva, see n. 55 above.
- Honingham E. *Recherches sur les Res Gestae Divi Saporis* Academie Royale de Belgique Memoires, vol.67.4 (Brussels, 1953)  
 Konow S. *Corpus Inscriptionum Indicarum, vol.2* (Calcutta 1929)  
 Marshall J. *Excavation at Charsada in the Frontier Province ASIRA 1902 - 3*  
 Martin M. *Exploration of Buddhist Ruins at Charsada, Peshawar Valley Punjab March 1882*  
 水野 "パキスタン 佛教遺跡 メハサンダ" 京都1969  
 水谷真成 訳注 "大唐西域記 1 玄奘" 東洋文庫653 平凡社 1999  
 中村元 "佛教美術に生きる理想" 中村元選集第23巻 春秋社 1995  
 長沢和俊 訳注 "法顕伝、宋雲行紀" 東洋文庫194 平凡社 1971

### Bibliography

#### 略記号

- ASIAR Archaeological Survey of India Annual Report  
 ASIFCAR Archaeological Survey of India Frontier Circle Annual Report  
 ASIR Archaeological Survey of India Report for the year  
 IO/ASIFC India Office Library, Archaeological Survey of India Frontier Circle Photo

#### 参考文献

- ASIFCAR "List of Ancient Monuments in the Frontier Circle" 1919 - 20  
 Beal.S *Si - yu - ki, Buddhist Records of the Western World* (London, 1883; 2<sup>nd</sup> ed. 1906)  
 Bellew H.W. *A General Report on the Yusufzais* (Lahore, 1864; repr. 1977)  
 Chavannes E. *Voyage de Song Yun dans l'Udyana et le Gandhara 518 - 522 AD*  
 Cribb J. *Numismatic Evidence for Kushano Sasanian Chronology* 1990  
 Cunningham A. ASIR 1863 - 64, vol.2(Simla, 1871)  
 Dani A.H. *Shaikhhan Dheri Excavation, 1963 and 1964 Seasons" Ancient Pakistan 2* 1965  
 Errington E. *The Western Discovery of the Art of Gandhara and the finds of Jamalgarhi* (PhD thesis London University, 1987)  
 Foucher A. *Notes sur la geographie ancienne du Gandhara BEFEO* (1901) *L'art Greco - bouddhique du Gandhara* (Paris 1901)  
 Garrick H.B.W. ASIR 1881 - 1882 vol.19 (Calcutta 1885)  
 Gordon D.H. *A Survey of Ancient Gandhara*, Journal of the Indian Anthropological Institute 1945  
 Hargreaves H. *Notes on the Ancient Geography of Gandhara* Calcutta, 1915

- Spooner D.B. *Excavations at Sahribahlol* ASIAR 1906 - 7  
 Stein A. *Excavations at Sahri Bahlol* ASIAR 1930  
 Taddei M. *The Site of Sahri Bahlol in Gandhara: Further Investigation* Naples 1985  
 Vogel J. Ph. *Inscribed Gandhara Sculptures* ASIAR 1903 - 4  
 Watters T. *On Yuan Chwang's Travels in India 629 - 645 A.D.* London 1904  
 Wheeler M. *Charsada: A Metropolis of the North West Frontier* (Oxford 1962)